

# 奈良 人権のモノ作り体験講座 ( 報告書 )



- 日時 2005年8月5日、12日、19日
- 場所 きれんセンター

## NPO ほっとねっと

---

協賛: 財団法人 水平社博物館、社団法人 奈良県部落解放企業連合会

後援: 奈良県、奈良県教育委員会

「子ども夢基金」(独立行政法人 国立オリンピック記念青少年総合センター) 助成活動

## 開催趣旨

奈良県は、日本の人権運動のさきがけとなった「水平社」の運動がおこされたところですが、この運動を陰で支えたのは、履物や革、毛皮、桐材といった伝統産業にたずさわる人々でした。

こうした伝統的地場産業は、今では人工素材の普及や安価な外国製品の輸入などによって、急速に衰退しつつありますが、今なお産業の歴史と伝統を誇りに、仕事を続けている職人さんたちがおられます。

私たちNPO「ほっとねっと」では、夏休みに県内の子ども（小学校高学年）と保護者、指導者を対象に、これらの産業で使う自然素材を材料にクラフト作品作りを行うことにより、地場産業の歴史や文化、産業と人権のかかわり等についていっしょに考えてみよう、と今回の企画を開催しました。こうした試みが、子ども達の感性にいい影響をもたらし、また、後継者育成等様々な課題を抱える関係業界の人々にも、今後の方向性を考えるためのヒントになれば、と願っています。

## プログラムと参加者

### ■第1回（8月5日）

「毛皮を利用したポーチ作り」

講師 / 菟田野町・丸谷昭仁さん

参加者 子ども = 24人、保護者・つきそい = 6人

### ■第2回（8月12日）

「桐材を利用したミニ下駄キーホルダー作り」

講師 / 竹川桐材店・竹川忠成さん

参加者 子ども = 22人、保護者・つきそい = 5人

### ■第3回（8月19日）

「牛革を利用したペンケース作り」

講師 / 元畝傍中学教員・吉住光洋さん

参加者 子ども = 20人、保護者・つきそい = 4人

# 第1回（8月5日） 「毛皮のポーチづくり」

■講師 丸谷昭人さん(菟田野町)

モノ作り講座、第1回目は8月5日。

菟田野町の丸谷昭人さんを講師に、伝統産業である毛皮を利用したポーチ作りに挑戦しました。毛皮革というと豪華なイメージがありますが、奈良県菟田野町が全国最大の産地になっており、鹿皮は95パーセント、毛皮も45パーセントのシェアを誇っている、とのこと。同時にこの毛皮革産業に携わった人たちは、早くから差別をなくすための水平社運動や、まちづくり運動の先駆とも言える大和同志会の活動に参加し、様々な取り組みを行っていた、といいます。



伊藤理事長のあいさつの後、毛皮職人の丸谷さんから、めずらしい様々な毛皮について紹介してもらいました。キツネやイタチ、テン、アライグマ…。はじめて見るいろいろな動物の原皮に子どもたちは興味津々。そのあと、ポーチ作りの要領について説明していただき、さっそく作業開始。菟田野町産業振興センターの宮坂さんからもいろいろアドバイスを頂き、ちょっと難しいところはスタッフや付添いの大人にも



でき上がったポーチ。なかなかいいでしょ。

手伝ってもらいながら、みよう見まねで縫っていきます。

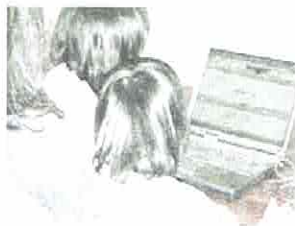


スタッフ

「イタイ！」  
「針でついたな。ハンノウコウ帖とき」といったやりとりもありましたが、子どもたちはめげずに作業を続けます。



肩からさける紐をつけて、毛皮を縫って再び、子どもたちには「これを売って買ってこれ作って」といって



きまして、等々と話合っていました。子どもたちも興味津々、スタッフも見守りながら、この作業について語り合っていました。

スタッフからは「いいな～、私もほしいよ～」といった声もあがっていました。



## 毛皮革産業と菟田野町

### ●毛皮革って、何？

毛皮革（もうひ かく）という呼称は、毛皮（けがわ）と革（かわ）が合体してできたと言われ、毛皮革産業とは、次の4つをさすとされています。

**1.毛皮**… 主には、北欧より原皮を輸入し、なめし加工、縫製、販売を行っています。

フォックス、ミンク等のコート、ストール等の他、ムートンの敷物類等、製造販売、etc.....



**2.鹿皮**… 主にはニュージーランド、中国等から原皮を輸入し、なめし加工をして出荷しています。主な用途は、武道具等。

**3.剥製（はくせい）**…

学術標本やインテリア用としての需要があり、製造、販売しています。



**4.筆毛**… 高級な書道の

筆の切っ先は数本使用される、独自の筆毛を製造、出荷しています

### ●毛皮革のふるさと

奈良県宇陀郡菟田野町（うたのちよう）は、毛皮革の全国最大の産地です。菟田野町は奈良県の中東部の山間に位置し、その歴史は古く古事記や日本書紀にも地名が出てくるなど古代ロマン漂う町で、国宝や重要文化財なども随所に点在しています。

面積 27.78 km、人口 4,766 人（2003 年現在）。戸数約 1,500 戸の小さな町ですが、産業界では、磨き丸太・高原野菜の他、毛皮革産業で全国的規模を誇っています。

毛皮革産業の中でも、菟田野町の鹿革の出荷高は、全国シェアの95%以上、毛皮も同じく45%のシェアを誇っています。また、原皮の輸入から、なめし加工、縫製、販売まで一貫したシステムをもつ産地は全国でも唯一菟田野町だけだそうです。

菟田野町では、いつ頃から毛皮革産業がおこなわれていたのでしょうか？

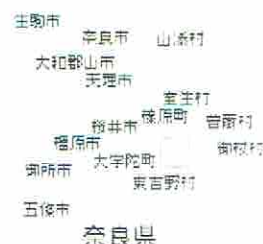
明治の末期に、菟田野町岩崎の藤岡勇吉さんが持ち込んだことが事業としてはじめられたきっかけといわれていますが、詳しいことはわかっていないようです。

しかしその後、同町岩崎の多くの人々が、この産業につくようになりました。

岩崎は、差別をなくする町、組みという点でも、早くから活動がおこなわれていたところですが、

その背景には、毛皮革産業でも、藤岡勇吉さんの親戚縁者にあたる藤岡龍太郎さん、治一郎さん、盛義さんなどが先輩として前身となった大和同産会で活動されていたことがわかっていますし、他にも多くの活動家が含まれました。

岩崎は、大正時代でもほとんどの人が学校にいており、昔から教育や自治に対する意識も高いところといわれていますが、毛皮革産業による経済的な支えがあったからこそそうした意識が育まれたと言えるでしょう。



## 第2回（8月12日）

### 「桐下駄のキーホルダーづくり」

■講師 竹川忠成さん（御所市）

2回目は8月12日。御所市の竹川忠成さんを講師に、ミニ桐下駄キーホルダー作りを行いました。

竹川さんのところは、おじいさん（忠治さん）の代からの桐材の仕事をしてあられますが、そのおじいさんは水平社の前身の親ほく団体「蒸（つばめ）会」の活動に参加しており、仲間とともに1922（大正11）年9月の水平社創立大会に参加、その後東北方面に桐材の買い付けにいったという足取りが、おじいさんの持っていた蒸会の集印帳（スタンプ帳、水平社博物館に展示されています）からわかっています。

桐の木は、ゴマンハグサ科に属し、実は木ではなく草の仲間だということ、色白で美しく、狂いも少ない、湿気を寄せつけず、熱にも強い等、昔からタンスや大事なものを入れる箱、琴などの楽器、下駄等に利用されてきたこと…。

説明を受けた後、下駄のミニチュアキーホルダー作りへ。書道にも精通している竹川さんは、子どもたちのために象形文字を書いて、下駄の台の部分を下ごしらえしてくれていました。



思い思いに気を入った土台と墨線を描いた土台に鼻緒をつけます。簡単ながらも、結構難しい。「え〜、どうやるの?」と聞いて来るところから通して、そうそう、出来ていくと驚かす竹川さん。みんな可愛まて作り終

ると、おじいさんの集印帳を見せながら、昔の集印帳をみせてくれました。



桐（キリ） / ゴマンハグサ科の落葉高木で、英語ではpaulownia（ポロニア）と呼ばれる。成長はきわめて早く、幹は高さ10 mにも達する。材は、日本の樹木の中で最も軽く、色白で木肌は美しく、狂いが少ない、さらに、湿度の通過性や熱伝導率がきわめて小さい特性を持っているため、

タンスや高級貴重品を収納する箱のほか、琴、琵琶等の楽器、下駄等の日用品に至るまで幅広く使用されている。また屑を焼いて懐炉灰に用いたほか、樹皮は染料、葉は除虫用に使われてきた。

## 桐材産業と水平社運動

差別に対して「人の世に熟あれ 人間に光あれ」と立ち上がった水平社は、1922年の3月3日、京都で創立されましたが、その中心になったのは、御所市柏原の人たちでした。

水平社ができる前、柏原には燕会という親ほく団体がありました。そのメンバーが全国の被差別部落の人々によびかけて結成されたのが、水平社ですが、メンバーの中には桐材産業にかかわる人々がたくさんいました。竹川忠司さん（講師の竹川さんのおじいさんにあたります）もその一人です。

御所市にある「水平社博物館」に竹川さんが寄贈された集印帳（スタンプ帳）が展示されています。燕会の会員用に作られたもので、表紙には三羽のツバメが舞をがいている燕会のマークが記されています。その最初には「大和垂坂駅 燕会同人 竹川忠司」と書いてあり、次には「大正11年3月」の墨書きとともに京都八坂神社と知恩院のスタンプが押されています。続いて「3月7日」の日付けとともに陸前岩沼（宮城県）・竹駒神社のスタンプが押されています。桐材商人であった竹川忠司さんは、大正11年3月3日の水平社の創立大会に行き、その前後に京都の寺社を回り、その後桐材の買い付けに東北へいったのでしょう。こうしたところからも桐材と水平社の関係をうかがい知ることができます。



燕会の人々と、集印帳

奈良県では明治初期の頃、豊後（豊前）からきて桐加工が始まりました。

水平社発祥の地、奈良県御所市から桐材加工は、明治十年代は、京都府から移って持ち帰ったのがはじまりとされています。

大和垂坂駅（旧村上駅）の編輯部がまとめた原簿は「京都府御所市 竹川忠司」の印、木印さし込み、梅の印が押されています。その後、株が切断し、さし込み印がなくなり、よって「根下野村」として「御所市柏原で竹川忠司の住居跡」は「至伊豆をばしのとする根下野村」として「生地屋さん」とはぼつぼつと「御所市」に遷はり、下野村に改称されました。

桐の性質「キリ」は、植えてから2年後に一度根元から切ったほうが速く成長する性質がある。「一度切る」ところから「キリ」という名がついたと言われている。

成長の早い木で、今でも女の子が産まると、桐の木を植えて、お嫁入りの時に（10年から15年で大きくなる）、その木で桐ダンスを作ると云う風習が行われているところもある。

桐は、吸水性が無く、湿気を通さず、狂わず、丈夫ということで和筆筒（たんす）に最適の材。また、熱伝導性が小さく、燃えにくいと云う不思議な性質も持っている（桐の発火点は425、杉は240℃程度）。実際、火事場で桐ダンスだけは表面だけが焦げて黒くなっていても、中身が無事という例がある。

## 第3回（8月19日）

# 「革のペンケースづくり」

■講師 吉住光洋さん（橿原市）

最後の3回目は、8月19日。元畝傍中学校の美術の先生だった吉住光洋さんの指導で、牛革のペンケースを作りました。

この日はまずクイズからスタート。「皮と革。どちらも『かわ』と読みますね。でもこの二つがどう違うか、知ってるかな？」

ちょっととまどう子ども達。スタッフも「…？」という顔をしています。

「皮は生の状態で、放っておくと腐ってしまいますが、これを腐らないように加工したものが革です。木曾からいるんな動物を捕って、肉を食べた後、人々は皮を革にして、衣服やはきもの、道具等いろいろなものを作って生活してきました。皮を革に加工する作業を『なめす』といいます。また、『革』という漢字には『新しく生まれ変わる』という意味もあります」との説明に一同「なるほど」。



特に奈良県では、戦後になって革靴や野球で使うグローブなどがたくさん生産されてきましたが、有名なプロ野球の選手も奈良県で作られたグローブを使っていること、最近の新聞に載っていた革の職人さん達の熟練の技の紹介などに、子どものみならず、スタッフからも驚きの声。

続いて、いよいよ自分で革を使ってのペンケース作りに移って



いきました。

トレーシングペーパーに型を写し取って、それを革に転写。それを切り抜いて、ポンチで穴をあけ、思い思いの模様をつけて、革紐を通して袋状にしていきます。



吉住さん



穴あけをテンポよくこなす子…。

最後の革紐通しの作業は、けっこう回くで時間がかかってしまい、ほとんどの子が最後まで完了できなかったのが少し残念でしたが、吉住先生は「残りはお家に帰って、お家の人に手伝ってもらって完成させてね。今日の事を話しながらね」「型を抜いてあまった革は、またいろいろの形にしてキーホルダーなんかを作るといいよ」とアドバイスしてくれました。



できあがりはこの感じ

## 革の歴史と奈良県の産業

### ●約4000年前から

革の歴史は古く、日本でも約4000年前には革製品がありました。

奈良県内の古墳からは鹿革で作ったポシェットのような袋が見つかっています。大切なものを入れる箱や鞍(くら)、沓(くつ)蹴鞠(けまり)などが革で作られていました。その頃の革作りの技術は、朝鮮半島から渡来人によって伝えられ、広まったと言われています。

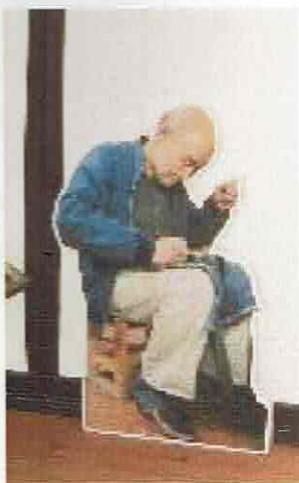
戦国時代の武士たちが使った鎧(よろい)や兜(かぶと)にも革が使われました。

江戸時代になると、庶民の間でもさまざまな革製品が作られるようになりました。さいふ、たばこ入れ、まくら、雪駄(せった)などです。また、太鼓や鼓、三味線もたくさん出回るようになりました。

幕末に活躍した坂本龍馬が靴をはいている写真が残されています。革靴はこの頃に日本に伝えられたのではないかとされています。

明治時代になると、日本政府は西洋式の軍隊を作りました。軍隊では、歩くために丈夫な靴が必要であったために、たくさんの軍靴が作られました。

### ●奈良県の皮革産業



第二次世界大戦後の1950年代になると、多くの人々が革靴をはくようになりました。

この頃から奈良県内では橿原市や大和郡山で靴作りがさかんに行われるようになりました。今では、外国から大量に安価な靴が輸入されるようになり、これ



らの地域の産業も大変厳しい状況になっていますが、大和郡山では奈良県靴工場団地で靴作りが行われています。また橿原でも、今も手作りで靴を作っている職人さんがおられます。



野球用のグローブ・ミットは1920年頃から磯城郡三宅町や桜井市で行われるようになりました。

伝統的な皮革生産の実績を踏まえ、美津濃運動具店(ミズノ)からグローブ用皮の裁断を依頼されたのを契機に、靴の甲皮縫製技術者とも協力して、全国一の産地となりました。大リーグやプロ野球の選手が使う高級品では、奈良県で生産されるグローブ・ミットが今も圧倒的な占有率を誇っています。高度な技術を要する手作業工程が多く、世界でも超一級といわれる職人技が奈良県で受け継がれています。

### ●奈良県部落解放企業連合会

<http://www.bl'nara.jp/nakiren/>

### ●水平社博物館

<http://www.1.mahoroba.ne.jp/~suihei/>

### ●おおくぼまつづくり館

<http://www.city.kashihara.nara.jp/okubo/index.html>



## まとめにかえて



3回の講座を通して、スタッフ自身もはじめて知ったことや、いろいろな発見がありました。

伝統産業にまつわる様々な歴史やエピソード。ちょっとふれただけですが、「奥が深いな～」という気がします。考えてみれば、モノ作りは人間の生活・労働の原点だから、当たり前のことかも知れませんが普段はなかなかそのことに気づいていません。

お金を出せば何でも買える、という時代ですが、自分で自分だけのオリジナルなものを作ることの喜びと感動をみんなで共有することができました。

なお、この講座は、独立行政法人 国立オリンピック記念青少年総合センターの「子ども夢基金」の助成、県と県教育委員会の後援、水平社博物館と奈良県部落解放企業連合会の協賛を得て開催したものです。お世話になった皆さん、大変ありがとうございました。



すばらしいモノづくりの技術が奈良県にあることを、もっと知ってほしい

## NPO ほっとねっと

630-8133 奈良市大安寺 1-23-1 県解放センター 2F

TEL: 0742-64-1631 FAX: 0742-64-1640

e-mail:hotnet@bllnara.jp

URL:<http://www.bllnara.jp/hotnet/top.html>



———— NPO ほっとねっと ————

